



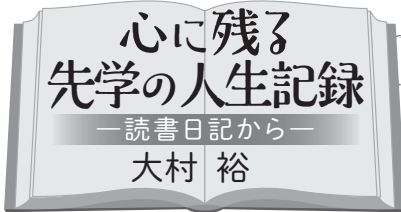
Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

# アルカ通信

## ARUKA Newsletter

NO.215  
2021.8.1

\*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。



第23回

### 「竹内理三 人と学問」編集委員会編 『竹内理三 人と学問』

(東京堂出版 1998年)

日本古代・中世史研究の碩学・竹内理三(1907~1997年)は、東京大学史料編纂所を停年退職した後、早稲田大学文学部教授に転じていたが、我が中央大学にも兼任講師として出講されていた。ちなみに私は在学中、先生の「日本社会経済史」の講義を受講している。

この本は、竹内の没後、弟子や交流のあった研究者たちが氏の思い出を綴ったものである。考古学者ではないが、研究者としての生き方、学問に対する姿勢に、私は深く共鳴するところがあるので取り上げる次第である。

竹内理三は1907年、愛知県知多郡岡田町にて農家の三男として出生。戦中・戦後の混乱の中で、竹内家は御多分に漏れず衣食住に難儀したが、竹内自身は「知多半島の田舎の出であったため、それほど苦にする様子はなかった」という(子息の竹内伸の証言)。幼少時の証言は認められない。学生時代の証言では、旧制第八高等学校時代は特待生であったこと、東京帝国史学科を1930年卒業した2年後に卒業論文(『奈良朝時代に於ける寺院経済の研究』)が恩師辻善之助の斡旋で大岡山書店より刊行されたことなどが注意を引く。

竹内の口癖は「よき研究者となるには**運・鈍・根**が必要じゃ」ということであるが、竹内に限り「**鈍**」は絶対に当てはまらない。竹内自身は「語学が出来なかった」と言っているが、謙遜であろう。旧制高校では、「語学の成績が悪ければ優等(特待)生にはなれなかった」からである(磯貝正義の証言)。竹内の頭脳が優秀なことは疑いようがないが、どうぞご自身は、本心からそうではないと考えていたようである。こんな述懐がある。〈石母田正君の『中世的世界の形成』は私に大きな衝撃を与えた。この時、『頭のすぐれた人間はすぐれた論文を書く、そうでないものは資料集をつくる』というドイツ人ヒルチヒの言葉が浮かんで来たのである。私のなすべきことは、論文を書くことより、すぐれた研究者に利用されるべき資料集をつくることにあったと知った〉(石母田正著作集 月報16 1990年 一部文章改変)。この謙虚さが後進や教え子に慕われた所以であろう。1948年東京帝国大学史料編纂所から九州帝国大学文学部教授に転出する折、同僚諸氏により「留任署名運動」が起こされているし(永島福太郎の証言)、その11年後九州大学から東京大学史料編纂所に戻るときにも、学部学生等による留任運動が起こされているのである(瀬野精一郎の証言)。「**根**」は自他共に認めるところである。戦前に①『寧楽遺文』(全3巻)、戦後には②『平安遺文』(全13巻)、そして東大停年退職後には③『鎌倉遺文』(本編42巻、補遺編4巻)を独力で、しかも本務の合間を縫って仕上げたのであった。安藤精一によれば、①と②は、「勤務時間中は本来の編纂の仕事をされ、昼食時にパンをかじりながら、あるいは勤務時間外に筆写したものである」という。この仕事の原動力となったのは、「史料(編纂所)にいるものは、(史料を)いくらでも見られるが、地方の学

者はそうはいかない」(林幹彌 括弧中の語句は大村補填)、「史料の利用、活用は、あらゆる研究者に平等に保証されるべきである」(佐藤和彦)という信念と使命感にあったと思われる。この結果、奈良・平安・鎌倉時代史研究の環境が整い、これらの時代の研究が飛躍的に発展したという。かの角田文衛も、「これまで管見の及ばなかった平安時代の古文書が続々と収められており、私は狂喜してそれらを翻読した」と書いている。こうした竹内の人柄と常人の及ばない業績に対して各大学が触手を動かさない筈はなく、九州大学に単身赴任して不便な生活を送っていた竹内を見て、大阪市立大学、早稲田大学、立教大学などが招聘を画策していたという。「就職の世話はしない。人から大学に誘われるような研究者になればよいのだ」(明石一紀の証言)という竹内の戒めは、自身の体験に基づくものであろう。「**運**」は自分でつかみ取るものなのかも知れない。

以下は、この本から抜粋した竹内による珠玉のような箴言の数々である。

「落ち込んだときには史料を写せ。学問は史料を写す手が覚えている」、「先行研究に対する敬意を忘れてはいけない。一つの論文で新しく書けることは一つか二つ。それも先行研究があったから書けるのである」(岡藤良敬の証言)、「人間は、金にならん仕事こそ、一生懸命にやらにゃいかんのじゃ。金になる仕事は、誰でもやりたがる。金にならん仕事をしつかりやるのが一番大切じゃ」(佐々木虔一の証言。傍点は大村)。「論文のいのちは3年から5年だが、史料集のいのちは永遠だよ」(貫達人の証言)。

さらに竹内語録を繙く。「縁の下の力持ちになれ」、「偉ぶるな」、「研究は好きなテーマだけをやればよい」、「自分が思うほど他人は評価してくれないものだ」、「つまらない論文を書くな」、「数代にわたって継承されるものでなければ真の学問ではない」、「研究の成果は机の前に座っている時間に比例する」、「どこへ行っても研究は続けられる」、「研究は就職のためにするものではない」、「陽の自ばかりを求めた樹はついに倒れて朽ち果てる。研究もまた同じである」、「他人の粗捜しをするな」(以上、明石一紀のメモによる。傍点は大村)

先生の、はにかみながら講義をするご様子が思い起こされ、肉声が伝わってくるような錯覚を覚える。最後に我々後学が元気になるエピソードを紹介する。先生が関わった『神奈川県史 資料編 古代・中世』にはミスが目立っているとの批判があったので、木村礎(明治大学)が「どれほどのミスがありますか」と質問したところ、「そうよなあ」としばらく考えたあと、「二千箇所ぐらいはあるかなあ」とごく自然な口調で回想されたという。誤りを恐れて逡巡するよりとにかく時機を捉えて形にする、誤りが発見されたらその都度訂正していけばよい、との泰然とした態度は多くの研究者をホッとさせることであろう。まさに「大行は細瑣を顧みず」である。

\*巻頭連載は隔月です。次回は鈴木正博さんです。

## 目次

■心に残る先学の人生記録 一読書日記から一 (第23回) 大村 裕 …1	■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト (第208回) 遠藤ゆきの …3
■考古学の履歴書 カナダで米寿をむかえました (第20回) 井川史子 …2	■考古学者の書棚 「土器様式の成立と背景」 原 明芳 …4

## 考古学の履歴書

## カナダで米寿をむかえました(第20回)

Fumiko Ikawa-Smith(井川史子)

## 20. マギル大学での考古学の授業

1980年代から1990年代にかけては前回で紹介した日本研究学会の創設に関与したり、国際学会参加のためたびたび出張したり、学内では東アジア研究センターの拡張に務めたりといそがしかったわけだが、このあいだも本職の考古学の授業は受け持っていた。どんな授業を受け持っていたのかを話す前に、ケベック州の教育制度とマギル大学の学生層の構成を簡単に説明しておく。カナダでは教育関係の政策は州政府の管轄に属する。ケベック州は1970年初期に教育制度を大幅に改革した結果、日本で戦後に小・中・高校6-3-3の学制と4年制の新制大学が導入される以前の制度に似た形になっている。小学校6年を経て、ハイスクールで5年間学んだあと、2年間カレッジ(短期大学)で一般教養のコースを習得してから大学に進学し、普通3年間に90単位を修得してBAの学位を授与される。但しこのコースが適用されるのはケベック州の教育課程を経てきた来た学生の場合で、それはマギル大学の場合、学部学生総数の約半数、残りの半数のそのまた半数(全体の1/4)はカナダの他の州の出身者、そして残る1/4はUSAも含めた諸外国から来た学生が占めている。これらケベック州以外から来ている人たちの多くは、フレッシュマン・プログラムで一般教養科目を30単位履修してから90単位の学位コースに登録するので、合計120単位、4年間の学生生活を過ごすことになる。

マギル大学の場合、ほとんどの科目が3単位とされているので、90単位修得するには30科目履修するというので、これを3年間にわけると、一年に10科目、すなわち秋学期、冬学期に5科目ずつの授業を受けるということになる。日本の大学では1科目の授業は週に1度ということが多かったように記憶しているが、マギルの場合は1科目3単位の授業時間は週に3時間、これを月・水・金1時間ずつ(教室の入れ替えに時間がかかるので実際には50分)週3回に分けて講義するか、または火・木曜日に週2回90分(事実80分)づつという構成で時間割が組まれている。秋学期は9月始から12月初旬までの13週間、1月-4月の冬学期も同様に13週間で、それぞれ39時間の授業時間が1科目を形成するという仕組みになっている。

私がマギル大学で教鞭をとった最後の年は2003-04年度、その年の人類学科の教員総数は17名、そのうち考古学者は4名で、1/4弱にあたる。その年のカレンダーに列記されている人類学科の学部学生向けの科目総数は57、そのうち考古学に関するものが14で、これも1/4弱に当たるが、リストされている科目のすべてがその年にかかわらずも開講されたわけではない。

## 東アジアと新世界の先史時代

人類学科のうちで、考古学を専攻する学生の必須科目として、「考古学理論の歴史」、「考古学の研究方法」などがあるが、これらは私の同僚がうけもって下さっていたので、私が就職以来ほとんど毎年のように受け持っていたのは「先史時代の東アジア」(Prehistory of East Asia)と題する科目。これを39時間の講義時間でどの様に扱ったのか、今手元もとに残っているシラバスをながめてみると、科目の目的として2項目を明記している。その一つは中国、朝鮮、日本、モンゴル、と東南アジアの一部、シベリア東部の先史時代について主な問題点を考察すること、その問題点とは、ヒトの出現と拡散、各地の狩猟採集民の道具と社会形態の比較、農耕の起源と伝播、文字のある社会の成立と周辺部との交流など。もう一つの目的はこれらの国で考古学が現在の社会で果たしている役割を考察することだ。この科目は人類学、考古学の初心者向けの科目をすでに履修した学生を対象にした中級レベルの科目として月・水・金曜日の時間割なら36回、火・

木曜日なら24回の講義をしたわけだが、更に上級生向けの科目として「先史時代東アジアの諸問題」というセミナーも隔年程度に提供していた。

これに次いでしばしば教えたのは同じく中級向けの講義と上級向けセミナーを組み合わせた、「Early Prehistory of the New World」という題の科目、「新世界の先史時代の始まり」とでも訳せばよいのだろうか。東北アジアの石器時代の延長としてのアメリカ大陸への人類移動、更新世末期から完新世への気候変動への適応、そしてクロヴィス石器文化より古いとされる石器群の検討など。新世界へ人類が入ったのは、いつ頃、どこから、何度あったのかは今だに活発な議論が続いている。実のところ、新大陸北部の氷原が解けて大型獣狩猟民の南下が可能になる前に、海岸つたいの狩猟採集民の移動があったのではないかという論旨を追求した論文集が、日本列島関係の資料に関する拙文もふくめて、近いうちに出版されることになっている。

## 先史社会の食物と栄養：ジェンダーの考古学

上記の2科目はいわば私の常設科目でほとんど毎年、すくなくとも隔年に提供していた。これに加えて、1980年代と1990年代に新テーマの2科目を導入した。1981年の春学期からはじめたのが、「先史社会の食物と栄養」(Food and Nutrition in Prehistoric Societies)という科目。一般に生態学的関心が強くなってきた頃で、考古学の動向も、石器、土器などの文化史的位置付けに焦点をおいた姿勢から、生業形態や食料獲得方法などを重視する方向に向かっていたが、出土した動植物遺体を列挙して、「こんなものを食べたのでしょう」と終わっていることが多かった。この科目ではそれを一歩すすめて、それら動植物をどうやって食べたか、そしてそれが人体の栄養の必要にどう作用していたかを追求してみる。その手段として、炭素・窒素の安定アイソトープ分析や微量元素分析など最近に開発された調査手法を紹介した。一年次の学生でも登録できる初級レベルの科目として開講したので人類学以外の学科の学生たちが選択科目として予想外に多数登録して、一時手に余ることもあった。

1999-2000年度の春学期に導入したのは「ジェンダーの考古学」(Gender in Archaeology)という科目。1980年代、1990年代はジェンダー論へ関心が高まってきたときで、私自身1998年7月にインドネシアで開催されたインド・太平洋先史学会(IPPA)で「日本考古学における女性の関与と考古学知識の解釈」と題する発表を羽生淳子さんと共著でしており、同年10月には、コロラド大学のS. Nelson教授とヘブリュー大学のRosen-Ayalon教授がイタリアのペラジオにあるロックフェラー・センターで主催された国際シンポジウムで「日本の先史時代のジェンダー」と題する発表をしたばかりだった。この上級生向けのセミナー形式の科目では、当時いくつか出ていたジェンダー関係の論文集所収の研究報告について、男女の分業体制、社会的地位、世帯・親族社会の構成、そして、考古学者のジェンダーが対象となる社会の解明にどのような影響を与えているかなどを考察した。

略歴	
1930年	神戸市長田村房王寺谷【現在：神戸市長田区房王寺町】に生れる
1948年	奈良女子高等師範学校附属高等学校卒業【現：奈良女子大学付属高等学校】
1953年	津田塾大学英文学科卒業
1953-54年	東京都立大学【現：首都大学東京】社会学研究室助手補
1954-55年	東京都立大学大学院社会科学研究所(社会人類学専攻)修士課程
1955年	フルブライト奨学生としてハーヴァード大学に留学
1958年	ラドクリフ大学(ハーヴァード大学の女子部【現在ハーヴァード大学に合流】)修士(人類学)
1958年	ラドクリフ大学 博士課程終了(人類学)
	1974年にハーヴァード大学人類学科に博士論文を提出、PhD授与
1964-66年	トロント大学人文学部人類学科 非常勤講師
1967-69年	マギル大学人文学部人類学科 非常勤教員
1970-2003年	マギル大学人文学部人類学科 専任教員：2009年以來名誉教授
1999-2000, 2004-2007年	カナダ日本学会会長
2004-2012年	東亜考古学会会長
2005年	瑞宝小授章
2017年	カナダ日本学会ライフタイムサービス賞

隔月連載です。次回は間壁忠彦先生・間壁霞子先生です。



## リレーエッセイ

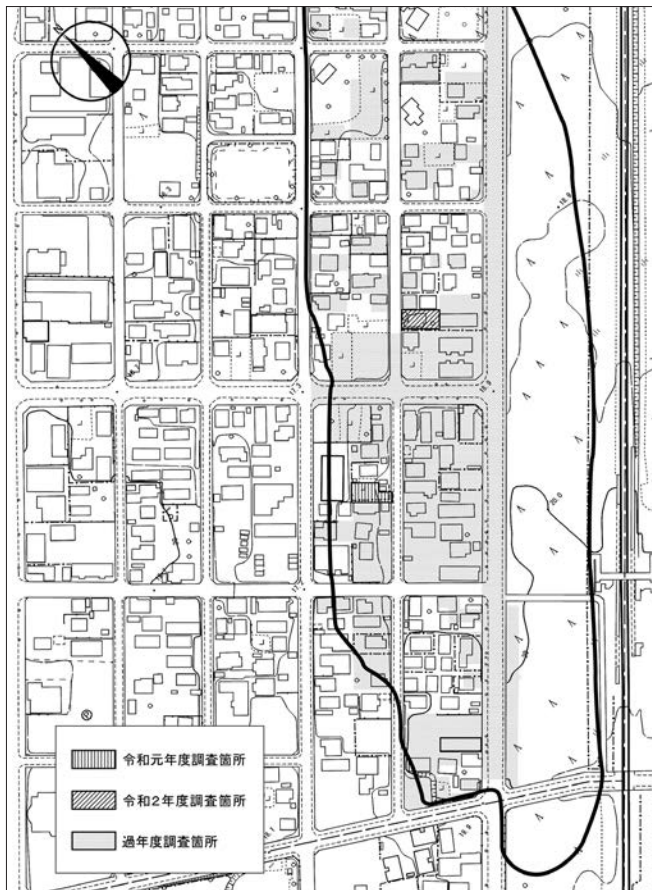
### マイ・フェイバレット・サイト 208

## 高砂遺跡 ～北海道江別市

遠藤 ゆきの

私は北海道江別市に所在する高砂遺跡をご紹介します。江別市は札幌市の東に隣接する街で、石狩川の下流域に位置しています。市街地の中心部は石狩平野へ南北に伸びる野幌丘陵上に形成され、市内で現在確認されている142箇所の遺跡の多くは丘陵上や縁辺部に所在します。

高砂遺跡も丘陵上に分布する遺跡の一つで、かつて丘陵中央部を北上し石狩川へ注いでいた虫除(モシヨッケ)川の右岸に位置しています。発掘調査は昭和39年の第一次調査を皮切りに、令和2年度までに20回以上実施しました。住居跡は230軒以上、墓及び落とし穴などの土壌は1600基以上検出しており、遺物は110万点以上出土していることから市内でも最大規模の遺跡に数えられます。



▲高砂遺跡位置図と近年の調査箇所(江別市教育委員会2021より引用)※太線は遺跡範囲



▲縄文中期の住居跡

遺跡の中央部には縄文中期後半～後期初頭の集落が広がり、竪穴住居跡が多く分布します。北東部へ外れると遺構の分布はまばらになり、落とし穴などの土壌が点在するようになります。一方集落の南西部には縄文晩期～続縄文時代初頭の土壌墓群が広がり、遺跡の様相が変化します。

遺跡全体を通して縄文早期から擦文時代にかけての遺物が出土しており、長期間に渡って土地が利用されていたことを物語っています。特に土壌墓群エリアは大量の遺物を伴い、熊頭形石製品や琥珀玉、黒曜石製の岩偶など特徴的な出土品が数多くみられます。



▲異形石器出土状況

近年の調査では遺跡中央部の住居群エリアから異形石器が出土しました。また、土壌墓群を東側に外れた遺跡外縁部からも蛇紋岩製の大型大珠が出土しています。過去の調査傾向とは異なる区域から特徴的な遺物が出土したことは、遺跡の再評価に繋がる重要な発見でした。

しかし、これほどの遺構や遺物が出土しているものの、土壌墓群を形成した人々の居住地や集落の終焉時期など不明な点は多く、数々の謎が残ります。今後も未調査地区の調査を行うと同時に、長年蓄積されてきた膨大な調査資料を改めて整理し集落の全体像を再確認する必要があると考えています。

市街地に面した高砂遺跡では、調査を行っている地域の方々が興味を持って声をかけてくれることがあります。遠い昔にも同じ地域に住んでいた人々がいた事を伝えると、遺跡を身近なものに感じてもらえるようです。地域の歴史に興味をもってもらうきっかけになるよう、今後も調査の成果を発信していきたいと思えます。

#### 参考文献:

- 北海道開拓記念館 1981「野幌丘陵とその周辺の自然と歴史」北海道開拓記念館研究報告第6号
- 野中一宏 1998「高砂遺跡の集落—石狩低地帯における縄文中期集落遺跡内の一変遷例—」『時の絆』
- 江別市教育委員会2010「江別の遺跡をめぐる」
- 江別市教育委員会2019「高砂遺跡(23)江別市内遺跡分布調査(5)」江別市文化財調査報告書126
- 江別市教育委員会2021「高砂遺跡(24)」江別市文化財調査報告書127

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは加藤江莉さんです。

## 考古学者の書棚

## 「土器様式の成立と背景」

西弘海 著／真陽社(1986初版)

原 明芳

1980年代、長野県は、高速交通網の整備や農業基盤整備事業に伴って、広大な面積を対象とした遺跡調査が始まった。私も長野県埋蔵文化財センターに所属し、長野自動車道に関連した奈良・平安時代の大規模集落遺跡の調査に着手するところであった。各調査担当者は、調査の目的に、集落の変遷を明らかにし少しでも古代社会を迫ることを据えた。

最初に大きな課題となったのが景観の変遷を明らかにすること。その前提となる同時存在の遺構を把握するための時間の物差し、土器編年の作成であった。

私の担当は塩尻市吉田川西遺跡。ほかの遺跡より1年早く発掘調査が終わり、洗浄、接合を進める中で、多量の土器の観察ができた。平行して、土器編年に関する数多くの論文を読み、シンポジウムにも参加し、時には編年の試論も発表し意見をいただいた。

ただ、でき上がっていく編年表を眺めていると、当然のことではあるが、新しい器種が登場し、逆に器種が消え、結果的に土器の組み合わせが変わっていく。どうしてなのだろう。単純な疑問はあるが、答えが見つからず、頭からいつも離れることはなかった。

そのような時に、出会ったのがこの本、収録されている論文であった。

著者の西弘海は、奈良国立文化財研究所に在職中、1985年5月に惜しまれながら38歳で生涯を閉じる。この本は、かれの土器に関する著作を中心に集め、翌年に刊行された遺稿集である。

西弘海の業績は、都城の発掘調査に長年携わり、藤原京飛鳥Ⅰ～Ⅴ、平城Ⅰ～Ⅴの都城の土器編年を確立したことで有名である。亡くなって40年以上経つが、その成果は広く用いられ、評価は現在もゆるぎない。また、法量やそれに基づく器種分類、土器の種類をこえた互換性への着目など、彼が重視した土器研究の視点も、現在に受け継がれている。

ここで取り上げたいのは、次の二つの著作である。

最初に読んだのが、『西日本の土師器』（『世界陶磁全集』2日本古代 小学館 1978年）、次に遺稿集のタイトルともなる、『土器様式の成立とその背景』（『考古学論考—小林行雄博士古稀記念論文集』平凡社 1982年）であった。ただ、掲載されている年譜を見ると、後者はすでに1974年に脱稿されており、それをもとに前者が書かれていたことがわかる。内容は共通しているが、前者が西日本を対象にして一般向けのため図や写真も多く用いられている。ここでは、後者を取り上げてみたい。

対象とするのは、古墳時代から中世、土師器の出現から中世の瓦器の登場までの1000年近く。一つの様式は、変革期とその後の自然な型式変化のまとまりとしてとらえ、様式の特徴を抽出して、様式変化の背景を社会的、文化的状況と関連づ

けて説明している。最初の変革期は、5世紀後半から6世紀前半、西日本は須恵器杯の食器類の充実を特徴にあげる。背景は、朝鮮三国の生活習慣に倣った食器使用習慣の定着、発展である。関東地方は、須恵器の代わりに土師器で実現した鬼高式土器が成立する。

次は、7世紀前半、導入された仏教文化を基調とした「金属器指向型」の器種の登場である。やがてそれらの器種は、法量の規格性を前提とした著しい器種分化で発展し、新たな土器様式を7世紀末に成立させる。この背景は、律令国家の中核をなす官僚制の発展、その特殊な生活形態を前提として理解できるとする。この土器様式をいささか奇妙な表現と断って「律令的土器様式」と呼んでいる。その後の国家整備とともに広範な地域に、広い斉一制をもつ土器様式を成立させたまとめる。自らが担当した都城の土器であり、当然力が入っている。ただ、「律令的土器様式」について多くを語らないうちに亡くなってしまったため、さまざまな解釈を生み、現在でも大きな論争を生んでいる。

続く9世紀は、越州窯系青磁の影響による「磁器形」の緑釉陶器、灰釉陶器が加わるが、土器様式の急激な転換を生じさせることはなかった。器種の減少、長い型式発展を経て、12世紀の畿内で、瓦器椀を主として瓦器小皿、土師器杯からなる極めて単純な器種構成が一般的になり、新たな土器様式が成立する。『西日本の土師器』では、古代土師器の終焉と、中世的世界の誕生とまとめる。

1000年以上の長い間を俯瞰して、いくつかの土器様式の成立過程、特質、その背景にある歴史的事象について、見事にまとめている。土器研究は、決して時間の物差しを作成するだけでなく、変化の背景にある歴史的事象に迫ることができることを示してくれた。私は疑問を払拭することができた。

西弘海は、もう一つ土器を研究する上での新しい視点を示した。それまでの土器研究は、製作技法などに注目して窯業生産体制、生産側に立脚していた。それに対して西弘海は、器種の分化、法量の規格性、土師器と須恵器の互換性など使用者側に立脚して土器を分析した。本書に所収する『奈良時代の食器類の器名とその用途』（初出 『研究論集 V』奈良国立文化財研究所 1979年）はその一連の業績である。

土器様式の変化は、使用する側が要求し、受け入れた生産者が実現した結果と、私は理解した。私の土器研究に、道筋を与えてくれた一冊である。

## アルカ通信 No.215

発行日	2021年8月1日
企画	角張淳一(故人)
発行	考古学研究所(株)アルカ
	〒384-0801 長野県小諸市甲49-15 TEL:0267-25-0299
	aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp